

教職課程における学生の自治的力量形成の実践と課題 — X大学における総合演習での取り組み—

A Educational Practice and Issues on the Teacher Training for Self-Government of school in the Teacher –Training Course

古里貴士[†]

Takashi FURUSATO

Abstract This note is on the educational practice and issues on teacher training for self-government of school in the teacher-training course. The essentials of this note follow as. ① It's basic of the educational practice that teacher grasps the life and thoughts and wishes of students. ② It's effective that teacher explains his thoughts and wishes after the reception of the thoughts and wishes of students. ③ There are conditions that teacher can train the students acquiring the skill of the self-government.

1. 教員養成段階における自治的力量形成の必要性

教員の専門性として何を身につけるべきかという問いは、これまでに幾度となく問われてきたことである。学校が子どもを中心としながら、保護者、地域住民、教職員といった人びとの思いや願いが交差する場であるのならば、教員に必要となるのは、こうした立場を異にする人びとのそれぞれの要求を把握しつつ、目の前の子どもに応じて意図的な働きかけを行う力であり、そのために必要とされる条件を獲得していく力である。それは、自治を行なうための力量形成といえるであろう。

もちろん、こうした力が大学における教員養成の段階だけで十全に身につくものではなく、子どもや保護者、地域住民、他の教員と現実に向き合いながら獲得されていく力であることは疑い得ない。しかし、教員養成の段階においても失われてはならない要素であることも確かであろう。それは、モンスターペアレントといわれる教員と保護者との関係づくりにかかわる問題がクローズアップされていることからしても、言いうることのように思われる。

本稿では、筆者による2010年度前期に行ったX大学における総合演習での取り組みの事例をふり返ることを通じて、そこから見えてくる教員養成段階における学生の自治的力量形成に関する課題について、若干の言及を行いたい。

2. 学生たちの思いの噴出

2・1 教員と学生が自らを語る時間

X大学は、愛知県内にある工業系の四年制大学である。X大学には、教員養成系の教育学部は設置されておらず、学生の中で教員免許の取得を希望する学生のみが専門の課程とは別に教職課程を履修している。X大学では、2010年4月に新たにキャンパスを名古屋市内につくり、元のキャンパスから経営学系の学部を移転した。筆者が担当したのは、新キャンパスで教職課程を取っている学生向けに開講した総合演習（以下、演習）であった。

4月9日が演習の第1回であり、受講者は3年生が4名、2年生が8名（のちに2名が受講取りやめ）であった。同学年の学生同士は互いに知っているものの、異なる学年の間は全く交流がないというところからのスタートであった。

この第1回、筆者が取り組んだのは、演習に参加する上での注意事項や今後の進め方などのアナウンスとともに、

[†] 名古屋大学大学院 教育発達科学研究科 研究生(名古屋市) / 愛知工業大学 非常勤講師

筆者の詳細な自己紹介をすることと、受講者にも自己紹介を行なってもらうことであった。この自己紹介が第1回の演習で筆者が重視したことであった。そのため、まず筆者が自分のことを学生にむかって語った後に、受講者には筆者が準備したプリントに自分の紹介を自由に綴ってもらい、その後一人ひとり他の学生に向かって自らのことを語ってもらった。この自己紹介に初回の時間の大部分を使った。

筆者がこうした自己紹介を重視したのは、次のような理由によるものであった。まず、学習者の営む生活や置かれた状況、その中で抱えている思いや願いを具体的に把握することが教育の基礎であると筆者は考えている。しかし、筆者は非常勤講師という立場であるため、日常的に学生と接することができないという限界がある。そのため、最初の講義で学生に自分自身を紹介してもらい、学生と接する限られた時間の中で可能な限り学生のことを理解するきっかけとしたいと考えてのことであった。また、学生同士がお互いのことを知り、人間関係を深めることでより充実した演習にしてほしいという思いもあった。

また、この自己紹介では、学生が自己紹介をする前に筆者自身が自己紹介をするようにしている。その時には、出身地や好きなものなどの紹介に加え、筆者の学校での体験、教育学を研究するようになったきっかけや問題意識を具体的に紹介するようにした。そうすることで、一般的に自己紹介で行われる名前や出身、趣味を紹介するという形にとらわれず、学生が自分自身のことを自由に綴り、語ることができるような雰囲気をつくることをねらった。それだけでなく、筆者は、講義を担当する教員の人となりを知ることが、その講義をより充実させるために必要であると考えているため、詳しい自己紹介をすることで筆者の人となりを知ってほしいということも意図していた。

もちろん、筆者が自身の問題意識などを詳しく語ったからといって、学生が自らの思いなどすぐれて内面的なことをいきなり語ってくれるとは思っていなかった。実際に語られた自己紹介の内容は、出身や学年、所属、趣味などが中心であった。しかし、その中でも自分の過去の経験などを一部含んだものもあった。自己紹介を通じて、共通の趣味がわかり、2年生と3年生がそのことについて話している姿が、演習後に見られたため、お互いの人間関係を深めることについては、そのきっかけとなっているようであった。

2・2 麻雀禁止によって明らかになった学生たちの思い

筆者が全15回のシラバスを作成した時点では、前半は映像や筆者が準備した文献を見た後に、それに基づくディスカッションすることにしていて、また後半は、学生が興味のあるテーマを自分で一つ設定し、そのテーマに沿った文

献を探して、それに基づきレジュメを作成した上で発表してもらい、その発表に基づくディスカッションを行なう予定であった。こうした内容を計画したのは、この演習に学生が主体性をもって参加することや、自らが設定した一つのテーマを掘り下げることを通じて、調査の方法や意見のまとめ方などを身につけることをねらったからであった。

しかし、前半に予定していた内容に実際に取りかかると、決してうまくはいかなかった。前半は、まず映像を見て、筆者が一つの話題やテーマを提起し、あるいは感想を述べてもらって、それをもとにディスカッションを進める形をとった。映像そのものに対する学生の反応は良かったものの、学生からの積極的な発言を導き出し、ディスカッションを通じて掘り下げることができずにいた。筆者が学生を指名したら、それにはきちんと答えてくれる。だが、他の学生の発言をふまえて自分の意見や感想を言うことや、反論を言うことはほぼなかった。そのため、どうやって学生が積極的にこの演習に取り組むことができるようになるのかということが、筆者の課題であった。

5月末、新キャンパスの校舎内に、突如として学内での麻雀禁止の張り紙が行なわれた。この張り紙を見た時、筆者には引っかかるものがあった。筆者は、演習の前の時間に環境関係の講義を担当しており、受講者には毎回リアクションペーパーを提出してもらっていたのだが、その中で休み時間をどうすごしていいかわからないという悩みが何人もから寄せられていた。新キャンパスは、名古屋市の市街地に作られたため、キャンパスが狭い上に校舎以外のスペースがほとんどなく、学生が空いた時間を過ごせるようにはなっていなかった。かといって、近隣にも学生が休み時間を過ごす場所はなく、少し離れたところまでいくと次の講義に間に合わない。そのため、空いた時間を学内でどうやってつぶすのかが、学生たちの悩みであった。その中で麻雀禁止であった。

筆者は、リアクションペーパーを書いている時間に、張り紙のことに触れ、麻雀禁止をどう思うのかということを知りたいと学生に問いかけた。すると、張り紙に対する批判の意見が複数寄せられ、学生たちがこのルールを不満に思っていることが見て取れた。演習の参加者には、前のキャンパスで苦労の末に麻雀サークルを立ち上げたHくんがいることが自己紹介を通じてわかっていたので、演習の中でその学生に麻雀禁止の張り紙をどう思うのか尋ねることを筆者はこの時決めていた。

そして、演習の中で、筆者がHくんが麻雀禁止のことをたずね、Hくんがおかしいと思うと答えた瞬間、他の学生からも、大学に対する不満が噴出した。それは、キャンパスの狭さ、旧キャンパスと新キャンパスとの行き来の不便さなどキャンパス移転に伴う条件の低下に関する不満や、学生に対する一部教員の発言や行動から自分たちを見下すようなまなざしを感じとっている不満などさまざまな不満

が口々に語られ、時には怒号にも似た不満が爆発した。学生たちが現状に大きな不満を抱いていることは明らかであった。そして、ディスカッションではなかなか発言しない学生たちが、自らを取り巻く問題に対しては誰から意見を求められるでもなく、積極的にその不満を口に出せたことが、筆者には発見であった。

その日の演習終了後、大学に対する不満をまだ口々に語っている一部の学生に対し、筆者は自分たちの置かれた状況を調査し、その改善を大学に提案することを、この演習で取り組んでみたらどうかと持ちかけてみた。それは、身近な大学生活に対する不満を課題化することによって、学生が積極的に演習にできるのではないかと考えたからであった。学生たちの反応は、やってみたいというものであったので、翌週の演習で参加者全員に筆者の提案を改めて語り、当初の計画をすべて取りやめて、新キャンパスでの生活をよくするための要望書づくりに取り組むことになった。

3. 要望書づくりから懇談会の開催へ

3・1 学生生活の課題の洗い出しと要望の集約化

計画を変更した時点で、残された時間は90分の演習7回分しかなかった。最初の回は、前回の演習で学生から口々に語られた不満を、思い出しながら名刺サイズの紙に書き出し、書き出された不満をグループごとにまとめながら、自分たちが抱えている不満の内容と傾向を洗い出すことであった。そこで出された不満は、講義に対する不満、施設に関する不満、大学内のルールや部活・サークルなど大学生活に関わる不満に概ね分けることができた。

しかし、ここで出された不満はあくまでも自分たちの不満であり、他の学生に聞いたらこれとは異なる不満が出てくるのではないかと、特に演習に参加していない1年生や4年生などは、その学年に固有の不満もあるのではないかとということになり、アンケートを作成して実施することになった。そこで、6月18日、25日の2回はアンケートの実施方法や対象、項目などに関する話しあいとアンケートの作成を行なった。アンケートでは、講義について、施設について、部活・その他についてという三つの大項目に分けた上で、大項目ごとに2つから5つの小項目をつくり、小項目ごとに悪いから良いまでの5段階で回答する形をとった。また大項目ごとに自由既述欄を設けた。

作成したアンケートは、7月上旬にいくつかの講義を通じて実施し、また演習参加者の周囲の学生に対しても実施した。結果、159の回答を回収できた。ただし、この時期には就職活動でほとんど講義に出てくることのない4年生については4名の回答に留まった。

回収したアンケートをそれぞれ持ち寄り、7月2日と9日に集計を行なった。また、9日には、アンケート項目に

応じて担当するグループを作り、集計結果をもとにどのような課題を学生が抱えているのか、どのような要望が考えられるのかをグループごとに考えた。16日には各グループから出された考察の結果をもちより、参加者全員で再び議論を行なった。

その際に、筆者が学生に対して注意を促したのが、アンケートで出てきた学生の数ある不満をそのまま要望としてぶつけるのではなく、自分たちの要望としてまとめるのにどういった形がふさわしいのか、その取捨選択と要望の仕方を考えるようにすることであった。それは、何が自分たちの要望としてふさわしいのか、また現状としてどのような要望であれば聞き入れてもらいやすいのか、そうした見極めを行なう力を学生に養って欲しいと考えたからであった。また、単に自分たちの思いだけで要望をまとめるのではなく、学生数などのデータなどを用いながら要望を練るようにも伝えた。

学生たちもその点については心得ており、例えば、自分が講義に何度出席し欠席したのかわかるようなシステムにしてほしいという意見に関しては、「講義に出席することが前提であって、欠席した回数がわからないほど休むというのは、学生側の問題なのではないか」などと話しあい、その要望は盛り込まないことになった。このように、アンケートに出された意見を吟味しながら要望書の作成を進めた。

そして、7月30日、要望書が完成した。現状の課題と要望についてまとめた部分と、アンケート結果を集計しグラフ及び自由既述欄に出された意見を抜き出しまとめた資料の部分からなる全23ページの要望書であった。

3・2 教員・職員との懇談会の開催

要望書を作成している頃、X大学に専任教員として働いている筆者の知人が、総合演習の参加者が所属する学部の学部長に連絡をとり、学生と学部長との間で要望書に基づく懇談会を開催できるよう取り計らってくれた。学部長も快く承諾してくださり、8月6日の午後に懇談会を行なうことになった。

筆者は、この懇談会で学生の要望を伝えたからといって、すぐに学生の要望が実現するとは考えていなかった。しかし、自分たちの学生生活をよりよくするためには、自分たちの思いや要望をきちんと伝えることが必要だということを感じてほしいこと、また教員側の説明や回答と自分たちの要望をすり合わせながら、理想と現実の間で何が実現可能なのかを考えてほしいということを考えて、この懇談会の場を設定した。

6日は、都合の合わない学生を除いた3年生1名、2年生4名が参加した。当日は、学部長が学科長と事務長にも声をかけておいてくださり、3名の教職員が学生と懇談してくださった。懇談会前のランチミーティングで、唯一の

3年生には中心になって話を進めるように指示をし、他の2年生もちゃんとフォローするように伝えた。この懇談会は学生が主人公であるので、懇談会が始まったら教員は口を出すべきではないと思っていたので、筆者は懇談会の場では、直接質問された場合以外には口を開かなかった。

懇談会では、学生側の要望に教職員側が一つ一つ回答を行なった。すぐに何かを改善するという回答は引き出せなかった。しかし、例えば、食堂を安くするか、量を多くして欲しいという要望に対しては、食堂には採算ラインがあるため値段を下げるのが難しく、量とメニューを増やすことで学生の要望に対応してもらっているといった現在の取り組みが説明された。また、学生が食事後も食堂に留まってしまうという現在抱えている問題も情報提供してもらい、新たに考えなければならない課題を持って帰ることになった。

懇談会終了後の感想交流では、学生の中には、自分たちの要望を伝えることができ、教職員の側も学生たちの要望を受け止めてくれたことへの充実感と、教職員の側からの説明に対してうまく反論できなかった悔しさとが入りまじっているようであった。しかし、普段では交流することのない異学年の学生と一つのことに取り組めたことは学生たちにとっていい経験になったようであり、学生の自主的な活動として4月に学生主催の新入生歓迎会に取り組んでみたかどうかという案も飛び出した。

4. 要望書づくり実践の到達点と課題

こうしてふり返ってみると、第一回のときに自己紹介を行い、多少なりとも学生の生活の状況を把握していたことが、その後の麻雀禁止の張り紙が掲示された際の学生への働きかけへとつながり、最終的には要望書づくりへと発展したことがわかる。このことは、学生の生活状況やその中で抱えている思いや願いを把握するための働きかけが、教育実践の基礎であることを意味している。

また、要望書を作成する過程では、学生の思いや考えを一端は教員の側が受け止めた上で、要望を聞く教員の立場からの意見を率直に投げ返したことが、学生が要望書をまとめる際の指導としては有効であったように思う。その際、「こうすべきだ」とか「これではいけない」という指導の仕方ではなく、「教員の立場からはこの要望についてはこのように考えるが、君たちはどう思うのか」という発問の形で投げ返すことが、学生たちが異なる立場の意見を受け止めて、さらに深く要望を考えることに結びついたように思う。ただし、今回の要望書づくりでは、要望書を作成する過程で、いかに学生たちが学んでいる専門課程での内容と要望書づくりを結びつけるのかという点では課題が残った。

加えて、以上のような形で要望書づくりに取り組むことができたのは、それを可能にする条件がつくられていたと

いうこともある。例えば、キャンパス移転という目に見えて大きな課題を抱える出来事と今年度の総合演習とが重なったことが、学生の抱える課題を探り当てることを容易にした。また、学生と正面から向き合ってくださいる教職員の方々がいらっしやっただことで、締めくくりに懇談会を開催することができたし、そもそも学生による要望書づくりという実践を許容してもらうことができた。こうした課題の明確さと大学内における一定の民主的な雰囲気、今回の実践を可能にする条件であった。

今回の実践では、学生のアンケートのみの実施で、関係部署の職員や教員に対するインタビューを実施するなどして、立場の異なる人びとの意見や要望を踏まえながら、一つの要望書に練り上げていくということは出来なかった。また、総合演習が終了した後も、学生たちが自主的な活動ができるように教員の立場から支えていくことが必要だと考えているが、新キャンパスでの講義がなく、学生たちと継続的に取り組むことができなかったことも課題として残されている。

(謝辞)

学部長、学科長、事務長には、お忙しいにもかかわらず学生たちのために時間を割いていただき、学生たちの意見を正面から受け止めて、さまざまなアドバイスをいただいた。記して、感謝したい。

(受理 平成 23 年 3 月 19 日)